
円卓無双

康頼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

円卓無双

【Nコード】

N0966BA

【作者名】

康頼

【あらすじ】

終焉の地を訪れた円卓最強の騎士ランスロット。
自らの行いの果ての結末を見て彼は何を思う。

prologue

そこは地獄のような風景だった。

ほんの数日まで、野花で溢れかえっていたキヤムランの丘は血という赤い絨毯に覆われ、白銀の鎧を纏う残骸からは死臭が漂い始めていた。

何故、このようなことに……

目の前の惨劇に吐き気を催しながら、ゆっくりと丘の頂きへと歩き始める。

鉄の匂いが鼻に充満し、時々血だまりに足を取られそうになるが、それでも歩き続けた。

足が取られ、思わず足元を覗いてみるとそこには同僚だった騎士の亡き骸あった。

彼は、頭を裂かれた傷で絶命しており、その姿は誇りある騎士そのものだった。

それに比べて自分の無様さには笑うしかない。
いや、そもそも私には笑う資格など無いのだ。

私が親友であり好敵手でもあった『太陽の騎士』ガウエインを打ち取らなければこんなことにはならなかっただろう。

私が誇りに思い忠義を誓った王に手傷を負わさなければ、王は死ぬことはなかっただろう。

私が裏切りなどしなければこのような結末は迎えなかっただろう。

私がいなければ、彼女が悲しむことはなかっただろう。

屍の道を踏み越えて、丘の頂きに辿りつく。

ここがこの戦いの終着点、王とその息子が死闘を演じた場所である。

足元には、絶望に歪んだ表情で朽ちた男の姿だった。

この男に抱く感情は複雑だ。

この男とアグラヴェインの企みにより、私の不義が暴露された。

そのことに関して怒りを感じてしまうことがあったが、今となっては憐れでしかない。

王を裏切ったことに関しても、私だけは批判をすることができない。

一人の結末を確認した足は再び丘を下り始めて、もう一つの結末を確認に向かう。

馬の背に跨り、最後にもう一度だけ丘の方に視線を向ける。

これが自らの罪だ。

背負うべき罪を目に焼き付けて、馬を走らせていく。

駆け抜ける自分の周りには誰もいない。

常に我々の先頭を走り続けた王も、隣で豪快に笑うガウエインも、その姿を見て静かに笑みを零すトリスタンも、自分とガウエインの後を追うことに必死だったガレスとガヘリスも、その光景を見て頬を釣り上げるケイも…

全てこの世界からいなくなってしまうた。

木々の隙間を縫うように走らせて向かった先は子供の頃、よく駆け回った森である。

ここが終焉の場所である。

馬から飛び降り、ゆっくりと歩き出す。

見慣れた懐かしい景色を見て思いだすのは幼少期、誇り高き騎士に憧れて腕を磨き続けた自分の姿である。

湖の精、ヴィヴィアンの元で完璧なる騎士に育てられた私は、今では全てを裏切った不義の騎士である。

懐かしい記憶に囚われつつも、歩みは何かに導かれるように進み、そして辿りついた。

樹齢数百年の大樹の幹の傍に、小さく土が盛られた傍に剣が突き刺さっていた。

それだけで、理解した。

ここが王が終焉した場所なのだと。

気付いた時には自分は両膝をつき、涙を流していた。
認めたくなかった。

私とは違い、完璧だった王が死んでしまったということに。
共に戦場を駆け抜けることができないことに。

.....

どれほどの時間が経っただろうか、背後に気配を感じ、思わず振り返る。

そこには憤怒の表情を貼り付けた忠義の騎士がいた。

隻腕から繰り出される槍捌きに、思わず身体は反応し、側面に飛び転がりながらも、愛剣アロンダイトに手を掛ける。

「ベディヴィア……」

「裏切り者の貴方が何の用です」

氷河のような冷たい殺意に、背筋を凍らせる。

彼が私に殺意を向けるのは当たり前だった。

私の裏切りから祖国は分かれ、戦いが起こり、多くの騎士と、同僚の円卓の騎士を失ったのだから。

茫然と彼を見るしかなかった私を見て、ベディヴィアの表情は怒りを露わす。

「何故、剣を抜かないのです？ それとも私ごとき相手をするのに剣はいらないと？」

流石は円卓の騎士筆頭です。と吐き捨てるベディヴィアに対し、私は剣を抜くことはできない。

私はもう仲間を斬りたくないのだ。

ガレスとガヘリス、ガウエインを殺めて、王に致命傷を与えた感触を思い出すと吐き気と悲しみしか思いださない。

だが抜かなければ間違い無く私は死ぬだろう。

確かに私と刃を交えて互角に戦えたのは、王とガウエインとトリスタンくらいである。

しかし、それは目の前にいるベディヴィアが弱いというわけではない。

戦場を共にかけた時に見せた彼の槍捌きは、驚嘆に値するもので、疾さでは円卓の騎士随一かもしれない。

「ならその飾りを抜いて差し上げましょう」

獣のような荒々しさから放たれた精錬された刺突の数は、六。人の身で回避できるものではない。

横に逃げるように跳び、回避できない突きは左手で受け止める。

鋼でできた籠手を貫き、血肉を切り裂いた突きを右手で掴む。

そのまま奪い取ろうと右手に力を加えるが、距離を詰めていたベディヴィアの蹴りにより阻止された。

「甘い」

「ぐっ」

瞬時に槍を離し、ベディヴィアの蹴りを受け止めると、そのまま後方に飛ぶ。

そのまま宙に浮いた私に向かって、ベディヴィア右手に持った槍を矢のように投げ飛ばす。

飛来する槍に対し、私ができることはアロンドイトを抜くことだけ

だった。

鞘から刃を抜き去ると同時に、槍を弾き返すと刃先をベディヴィアに向ける。

ベディヴィアは弾き返された槍を受け止めると、感触を確かめるように握り返す。

「流石ですね。 王が認めたことはあります」

称賛の言葉に込められた憎しみを受け止めた私は、刃先を地面に向ける。

「やめようベディヴィア」

力無く吐き出した私の一言にベディヴィアは呆気に取られたような表情を浮かべ――小さな声で笑い始める。

「王の御前だからですか？ ふん、笑わせてくれますね。裏切り者の貴方が」

その言葉に私は肯定するかのように頷き返す。
するとベディヴィアは、面白くなさそうに鼻を鳴らすと、槍を構える。

「なら、私は王に最後の手向けとして貴方の首を差し出す。それが騎士の務めだ」

仇討ち。

それは主を討たれた騎士にとって当たり前のことである。

なら私ができることは一つだ。

この首を差し出そう。

剣を収めた私にベディヴィアは吠える。

「なら、そのまま死ねっ！！！！」

一直線に私の心臓に向かう刺突を、私は受け入れるように眺める。
これが私にできる最後の忠義の表し方だ、と。

そんな自分を思わず笑ってしまう。

心残りと言えば、王自らの手で討たれたかった。

そう考えた私の目の前が光に包まれた。

第一話 s t a r t

風が頬を撫でる感触に思わず目を開く。

そこには青く染まった広大な大空が広がっており、その光景に思わず顔を顰めてしまう。

カムランの丘を去った際には日は既に落ちかかっていた。

だがしかし、目の前には見間違えることのない太陽が昇っており、つまり自分は何十時間も寝ていたことになる。

いや、そもそも私は本当に生きているのだろうか？

最後に見たベディヴィアの刺突は間違い無く、私自身の胸を貫いたはずだ。

が、胸元の傷どころか受けた際の左手傷すらもない。

ベディヴィアの姿などあるわけもなく、王の墓がある森の中でもない。

ただ、目の前に広がるのは荒野や草原、遙か遠くに聳え立つ見慣れない山々ぐらいだ。

身なりも城を出た時のままで、アロンドイトも腰に差さっている。

あの世か何かだろうか？

普段はそんな迷いごとを信じない私だが、その結論が一番しっくりくる。

様々な憶測を巡らせていると後方から何か近づく気配を感じ振り向いてみる。

一言でいうと悪役が似合いそうな輩だった。
黄色でそろえた頭巾に服装。

腰には安物のような剣を携えて、こちらに向かってニヤニヤと笑みを零す三人の男達である。

あの世の使いにしては盗賊のような男達だ。

軽い失望感を味わっていると、先頭に立っていた男が腰に携えた剣を抜き、こちらに剣先を向ける。

「よう、兄ちゃん。　良いモン腰にぶら下げているじゃねえか」

ニタニタと笑う男を見て、思わず溜め息をつきそうになる。
どうやらここはあの世ではないようだ。

むしろここがあの世なら、神に祈る者たちが半減するだろう。

となると色々聞かなければならないことがある。

「少し聞きたいことがあるのだが」

「ああっ？　何勝手にほざいてやがる。　さっさとその剣を寄こしやがれ」

何なら着てる鎧も頼むぜ、そう言つてニタニタ笑う男に、再び溜め息をつくと、腰にある名剣に手を添える。

一閃。

突き出した男の剣を柄の部分くらいから斬り飛ばすと、剣の先を男に向ける。

「少し、聞きたいことが、あるのだが？」

「ふひっ!!」

立場が逆転したことに恐れをなしたのか、それともようやく私との力量の差に気付いたのか、恐れるように尻もちをつく男に対して、後ろに控えていた男二人が慌てて武器を取ろうする。

「うひっ!!」

「ぶひっ!!」

瞬時に二人に殺意を叩きこむと、先程の男同様に腰を抜かしたように、その場に座り込む。

その不甲斐なさに呆れそうになるが、腐っても騎士。弱いものに向ける剣はない。

ようやく話を聞けると思い、私は剣を鞘に納める。

「さあ」

「へ、へい、ここは陳留という都市から二十里ほど離れたところでさ」

媚を売るような男の表情に一瞬苛立ちを感じたが、それ以上に考えることがある。

リというのは恐らく距離のことを指しているようだが、肝心のチンリウウという都市は聞いたことがない。

「コーンウォール、キャメロット、ブルターニュ……という言葉に聞き覚えは？」

「うえ……こー？　ろ？」

「ブル……」

「キャラメル？」

男達の反応からしてもどうやら私の知るような場所ではないようだ。案外、あの世説は当たりなのかもしれない。となればどうする？

やはり、都市なので情報収集するべきか。

「あの……旦那……俺らはもう行っても？」

顔を強張らせたまま笑う男に、私はもう一つ聞かなければならないことがある。

「ところでお前達、盗賊か何かだろう？」

再び剣に手を掛けると、男達に向けて殺気を向ける。

「ひい」

「旦那っ、俺らはちゃんとはなしたじゃねえか？」

泣きつくように訴える男たちの言葉を、私は慈悲も無く切り捨てる。

「それで、お前達の罪が消えるわけでもない。　お前達が私ではなく次の人間を襲うかもしれない」

流石にそれを捨てておくわけにはいかない。

いつの時代も、暴力というものは弱きものを傷つけるのだから。

「恨むなら私を恨め。　それを私は自身の罪とする」

ひと思いに切り捨てるのもまた慈悲か、そう考えていたが阿呆らしくて考えるのを止める。

それは加害者の傲慢だろう。

しかし私の剣が、彼らに向かって振り下ろされることはなかった。それは、天から降りてきた介入者により阻止される。

「まていい！！」

気配と殺意に、私は後方に飛ぶと、そこに赤き槍を携えた白き天女が舞い降りた。

艶のある肌が覗く露出の高い服装に、見たこともない青い髪の美女は、不敵な笑みを浮かべると、私に向けて赤き槍を向ける。

その美しさに思わず息を吞んでしまうが、次の瞬間、言いようのない罪悪感と不甲斐なさが私の心を締め付ける。

彼女という女性に恋をしたせいで国は滅んだのに、だ。

もしこの場に最愛がいたら、自分で首を切り落としたい気分だ。

「我が正義の槍は無法を許さぬっ！！」

吠えると同時に踏み込んだ彼女の動きに思わず、感心してしまう。そこから放たれる刺突の矢は、ベディヴィアほどではなかったが、それでも円卓に通じるほどだ。

即座にアロンドイトを抜き去り、刺突を弾く。

「むっ！！」

「だが、まだ青い。それでは戦場は生き抜けない」

「ふ、小癩なっ！！」

さらに速度を上げる槍捌きに、久しぶりに騎士としての高揚感が生まれた気がした。

なら私にできることはただ一つ、騎士として力を振るおう。

刺突を読み切ると、一步踏み込むと同時に一撃を振るう。

「なっ！！」

卓越された彼女の反応により、私の一撃は易々と受け止められるが、受け切れなかった衝撃により遙か後方に吹き飛ばされる。

「軽いな……もう少し食事を多く取るべきでは？」

「く……女子に言う言葉ではないな」

私の挑発に、さらに笑みを濃くした彼女はさらに速度を上げた刺突を放つ。

勿論、疾いだけでない。

しっかりと体重を乗せてはなった一撃は騎士数人ですら吹き飛ばす程の威力がある。

「が、それは判断ミスだ」

槍の通る道筋は、基本過ぎた。

先程までの変幻自在の槍捌きは失われていた。

上に巻き上げるように弾くと、無手になった彼女に距離を詰める。

「終わりだ」

剣を首筋に当てて、勝利に浸る。

間違い無く、彼女は強敵だ。

彼女に勝てる円卓の騎士は、自分を含めて数人程だろう。

「く、殺すがよい」

辱めは受けぬ。

そう目で訴えかける彼女に、思わず敬意を抱いた。

彼女は間違いなく私より優秀な騎士だ。

「疾さ、重さ共に中々なものだ。 槍捌きも驚嘆に値する。 が両
立ができていない」

それができれば、今度は死力を尽くして戦わなければならないだろう。
う。

彼女なら数年でできそうだが…

良い素質を持ったものを見て感動している私を、彼女は不審そうに
視線を送る

「む、何の話だ？」

「貴方のこれからの課題だ……えっと」

「趙子龍だ」

思わず名前を聞くことを忘れていた私は、彼女から名前を教えら
れと、その名を記憶の中に刻みこんだ
。

「それができれば貴方はまた強くなる、チョーシリユー」

「何か私の名前を呼ばれている気がしないのですが……」

私の発音が気に入らなかったのか、眉を顰めるチョーシリユーに対
して、苦笑いで誤魔化す。

私自身思っていたことである。

「……努力しよう。 しまった……女性に先に名乗らせてしまっ
たな。 私の名はランスロットだ」

彼女だけに名乗らせていたことに気付き、私も名前を名乗る。
少し前までは湖の騎士や円卓の騎士を名乗っていたが、今の私には
両方相応しくない。

「らんすっ?」

「呼びやすいように略しても構わない。 昔、ランスと呼ばれたこ
とがある」

やはり彼女には私の名前は言いにくかったようだ。
アグラヴェインやアグロヴァルなどとは違い、言いやすいと思って
いたのだが……

私の提案に彼女はほっとしたような笑みを浮かべて頷く。

「なら、らんす殿で」

「なら私はミス・チョーと呼んでもいいかな？」

「みす？　どういう意味か解りませんが、私自身名前を呼ばれる気がしないのですが……」

彼女の指摘に、私がこの世界の知識が知らないことと同様に、彼女自身も私の世界の常識が通じないのだろう。

「ではチョーでよろしいか？」

「いや、そのだ……それなら子龍と呼んでいただきたい」

「ではシリユー、そう呼ばせてもらおう」

「うむ」

何処か疲れたような笑みを浮かべるシリユーに不審に思いながらもとりあえず黙っておくことにした。

それ以前にやるべきことがある私は、手に持ったアロンドイトをシリユーの後方に向けて投擲する。

「ひいっ!!」

「逃げるなよ、盗賊諸君」

私とシリューが話し込んでいる間に逃げようとしていた男達の足元にアロンドイトは突き刺さった。

「ふむ、盗賊は彼らの方ですか」

「シリュー、貴方は確か私を疑っていたはずでは？」

「ぬう……そのようなこと貴方の剣筋を見れば解ることです」

「それに対し、貴方は少し真つすぐすぎる」

正義の槍とシリュー自身そう言っていたが、確かにそのような気がした。

彼女自身の性格も真つすぐなのだろう。

しかし今はシリューの話より先にすべきことがある。

私が一歩踏み出すと、男達は先程と同様に腰を抜かして震え始めた。流石にそこまで怯えられると、呆れを通り越して憐れに思え、慈悲の一つも与えなくなる。

後ろにいるシリューという女性の目の前で人を殺めるのもどうかと思う。

「おい、お前達、名前は？」

「か、韓忠です」

「そそそ、孫、仲です旦那」

「きききよ、？、都だな」

「……そうか、ならお前達はこれからはカン、ソン、キョウ、と名乗れ」

私がそういつと男達は呆気にとられたようにこちらを見る。

するといち早く反応できたリーダーだった男・カンは詰め寄るように口を開く。

「だ、旦那っ！ それは名前を変えろということですかいっ！」

「ああ、そうだ。 カンチューという輩は私がここで斬り捨てた」

それが私にできる唯一の慈悲である。

だが、それを聞いたシリューは不満げに眉を顰める。

無法者を野放しにすることは、彼女の正義にとって許されないことだろう。

「生まれ変わったお前達には、私が立派な騎士になれるように騎士道を叩きこんでやろう」

これは決定事項だ、とカン達に言ってやると、彼等は絶望を背負ったかのように頂垂れたのだった。

私とシリュー、そしてカン達が出会ったこの時、私の最後の物語が始まったのだった。

第二話 lead a new life

漢の都である洛陽の東方に位置する都市、陳留。
活気に満ちた大通りの脇にある小さな酒場。
そこに私達はいた。

「色々の都市を回ってみたが、やはりここが一番賑やかで活気がある」

「そうなのか？　しかし、ラクヨウ…と言ったか？　そこが一番賑やかではないのか？」

シリユーが満面の笑みで酒を呑み干す姿を横目で見ながら私も酒を口に運ぶ。

故郷の洋酒と違う味わいがあり、なかなか癖になる。

しかし、酒とは違いシリユーの大好物らしいメンマという食物はあまり美味しく感じなかった。

しかし、そのことを口に出すことはない。

言えば先程、店の外に蹴り飛ばされたキョウの二の舞になるだろう。彼の体格からしてメンマというものは食べ応えがないはずだ。

「そう言えば、旦那はこれからどうするんで？」

心配そうに口を開くカンに、賛同するようにソンも必死に頷く。彼等は私と行動を共にしなければならぬのだから。

「そうだな、とりあえず情報収集と言ったところか。　私はこの国の地理、文化に無知すぎる」

簡易な説明はシリューから聞かせてもらったが解らないことが多いが、多すぎる。

唯一解ったことが、今私がいる現在位置とこの国のこと、そして我が故郷から遠く離れた場所であることだ。

帰る方法が思い浮かばない以上、まずは、当分の拠点であるこの近辺の情報を調べておく必要があるだろう。

遠い話になるが、地道にでも情報を集めないと、死ぬまでこの異郷で暮らすことになる。

そして情報収集の合間に、この国の言葉を勉強しておくべきだろう。言葉は何故か通じているものの、文字の読み書きが当然ながら全くたりともできていないからだ。

これでは情報収集の効率が落ちるうえ、生活することもままならない。

「ふむ、確か、らんす殿はらんすという天の国の出身でしたね」

「天の国……それについては何も言えないが、『天の御遣い』と呼ばれる神聖なものではないことは確かだろう」

『天の御遣い』という存在がこの世界に現れるとこの国の魔導師が言っていたようだが、間違いなく私自身ではないことは理解できている。

私のような者がそのような大それたことを出来る筈がない。

シリューは私の鎧と剣を見て興奮しながらそう言っていたが、それならばこの鎧と剣を私に授けた王が『天の御遣い』なのだろう。

迷いを振り切るように器に入っている酒を呑み干すと、シリューが空になった器に注ぐのを見て、思わず尋ねてしまう。

「ところでシリューは何故私について来る？ 道案内を買って出てくれたのは有り難く思っているのだが？」

彼女は私と違い、しっかりとした目的がある。

自らの槍を捧げるに値する君主を探すという目的が、だ。

私も王に捧げた身であったため、そのことが騎士にとって大切なことだと理解している。

「ふふふ、らんす殿に興味ができてな…… 当分貴殿の傍で居させてもらおう」

「ふ、それは光栄なことだ」

にやにやと笑みを浮かべるシリューの言葉は聞いて、こちらも思わず顔を緩めてしまう。

彼女ほどの器量のある良い女にそう言われて嬉しくならない男などいないだろう。

「ということは当面はこの近辺の情報収集するということですかい？」

「ああ、それと資金調達だな。 金がないとどうにもならない」

この国の金を異邦人である私が持っているわけもなく、この場もシリューに奢っていたただく形になっている。

鎧と剣以外の、装飾品…… 宝石などは先程売り飛ばして金にしたが、その金もすぐに尽きるだろう。

つまり、早急に金になることをしなければならぬ。

「なら、此度の微兵に参加しては如何かな？ らんす殿ほどの腕があれば大金を手に入れることも簡単だろう」

「確か『黄巾賊』という輩を討つために民から微兵するのだったな？」

シリユーの提案は確かに的を得ている気がする。

私としても賊を野放しにすることは許し難きことであるうえ、戦功を上げれば纏まった金も手に入るだろう。何より、良い鍛錬になりそうだ。

「え、旦那……何ですかいその視線は？」

「参加するのは旦那なんですよね」

私の視線に、いち早く反応したカン、ソンは顔を青くさせながら口元をカタカタと震わせる。

そんな彼らの姿を見て、危険察知能力は成長しているようだと感じてしまう。

「私は言っただけだが？ 私はお前達を立派な騎士にすると」

実戦ほど経験を積めるものはない。故に彼らの参加は決定事項である。

が、それでも戦場の恐怖からか、二人は私に必死に懇願し始める。

「ちょ、俺達に戦は無理ですぜ！！」

「え、ええそうですよっ！！ 情報収集は俺達に任せてくださいよ

！！ そりゃ、ばつちり完璧に調べてきますから」

「却下だ。情報収集にも金が必要だ。何より一人より四人で参加する方が効率がいい」

微兵に参加できれば、他の人間とも繋がりができる。そこから情報を得ることもできるのだ。

私の決定にカン達は肩を落として自分の不運を呪っているのに対し、隣のシリューは面白くなさそうにこちらに視線を流す。

「何か問題があるのかな？」

「四人ということは、私が入っていないのですが？」

シリューの指摘通り、シリューは頭数には入れてはいない。カン達と違い、彼女の意志を縛ることは私にはできないからだ。

「貴方は好きにしていればいいのだが？」

「なら、私も参加しましょう。刃は交えはしましたが、並べてはいませんから」

四人より五人の方が効率がいいでしょう、と不敵な笑みを浮かべるシリューに呆れながらも否定することができなかった。

[illegible]

陳留を出て、数日。

我々陳留軍五千は、黄巾賊が住み着くといわれる山の眼先にまで迫っていた。

「つねに」

緊張のあまり胃液を吐き出すソんに、私は行軍中に集めた薬草を手渡す。

「吞まれるなよ。戦場で一番恐れるものは目の敵よりも恐れ委縮することだ」

特に戦い慣れてない者にとって最初の試練である。

戦場で委縮して、何でもなしで死んでしまう兵は少なくはないのだ。

それはソンだけでなく、カンやキョウ、周囲にいる民兵にも言えることだ。

「ふむ、確かにその通りですな。 流石らんす殿、良い言葉です」

軽口を言えるシリューは流石というもので、少しの緊張があるものの至って普段通りである。

ジョウザンのノボリリユウは迷いことではないようだ。

「しかし、この軍の主は中々なものだな」

「ほう、やはりわかりますか」

楽しみに笑うシリューの言うとおり、この軍は優秀である。民兵の足に合わせて正規軍が疲労を溜めない程度に調整し、周囲を囲む陣は鉄壁といってもおかしくない。

伝令も細かく飛ばし、探査を伸ばす慎重さも評価できる。何より正規軍の覇気が、士気が高い。

「ああ、確かソウソウというものらしいな？ この主は」

この軍を率いる者の名は、チンリユウに入るより前に耳にしていた。かなり優秀な女性だということもだ。

「はい、私が見た所一番の有力候補でしょうな、知、武、政に優れ、人を引っ張っていく魅力もあり、戦陣を切り裂く勇もある。まさに傑物というやつでしょう」

「なるほど、そのような者なら一度話してみたいものだな」

シリューの言葉に間違いがなければ、私はそのような人間を一人しか見たことない。

しかし、私の希望は面白そうに笑うシリューにより碎かれる。

「ふふ、それは難しいかもしれませんが。曹操殿はどうやら女子がお好きなようですから」

「……なるほど、それは残念だ」

「私も、それさえなければ我が槍を捧ぐことに迷いは無かったのですが……」

何か思い出したかのように疲れたような表情を浮かべるシリューに、私はこれ以上深く聞くことは止めた。

馬鹿話をしていると先頭のほうから伝令の旗を持った騎馬兵が現れる。

前方に黄巾賊、現ると。

第三話 win one's first game

臍物と鮮血が宙を舞い、人のうめき声と狂ったような奇声が響く。
まさに戦場とは人の世の地獄である。

慣れることのできない空間の中、私は借り物の剣と槍を振るい、賊を殺す。

幾多の戦場を共に切り抜けた相棒アロンドイトを使用しないのは、シリユーが目立つと言っていたからだ。

確かに湖の精が鍛えた聖剣なのだから、その辺にある名刀とは比べ物にはならないほどだ。

それ故に、その輝きに目を奪われる輩もいるだろう。

そのような者達に絡まれるのは、面倒この上ないことだ。

それは剣だけではなく、身に纏う鎧も同じことで、それを隠すためにぼろ衣のマントを羽織って隠している。

「しかし、らんす殿は槍も使えるのですね……今度、我が槍と交えてみませんか？」

「魅力的な御誘いだが、断らせてもらおう。私の恥技では、貴方の神槍には遠く及ばない」

使えると言っても、シリユーやベディヴィアのような卓越したものではないのだ。

比べることすら侮辱と言える。

「はっはっはっはっ、振られてしまったか。では再びりべんじをしても良いかな？」

「それは、楽しみにしよう」

世間話をするような会話の隙を狙ってなのか、賊共はシリユーと私に一斉に襲いかかる。

それと同時に隣のシリユーが一步踏み出すと、そこから近づくことさえ許されない超速の刺突を放ち、速賊共を屠る。

「む……会話の途中に割って入るとは礼儀がなっていないようだな……いいだろう、来いっ賊共っ！！ 趙子龍の槍捌き、思う存分に見せてやろうっ！！」

命を刈り取る彼女は何処か美しく北欧神話に登場する戦乙女のようにだが、彼女と対する賊にとっては死神そのものだろう。

舞い踊る戦姫の活躍を見ながらも、意識は常に後ろで戦うカン達に向ける。

兵数はこちらの方が優っている上、正規軍の活躍により士気でも優っている。

が、それでも犠牲は出るものだ。

彼らを騎士と育てると言った以上、つまらないことで死なせるわけにはいかない。

「らんす殿、彼等も中々骨があるじゃないですか？」

カン達の様子を見ていたのは私だけでないようで、シリユーも面白そうに彼らをの方に視線を送る。

人から見れば、シリユーなどの武に比べると、彼らの武は無様で醜いものかもしれない。

が、それでも必死に戦い、生きようとしていた。

「しかし、いきなり戦場に送るとは、らんす殿は指導は厳しいものですな」

「先に言っておくが、私は普段は新兵を戦場に送らない」

新兵を送るということは犠牲が多くなるということになる。

故に鍛錬を繰り返した後、戦場に送るとするのが常識なのだが、カン達はそれに当てはまらない。

「カン達は、彼らとは大きく違うことがある」

「ふむ……法を犯した無法者ということですか？」

目の前に迫る賊を蹴散らしながらも、シリューとの会話を続ける。

「そういうことだ。つまり目の前の賊達と何の変わりもないということだ」

それが此度の黄巾賊討伐戦に参加した理由へと繋がる。

今までの自分達の姿を認識させ、彼らが起こしてきた罪を、与えられるはずだった罰を見せることだった。

「もし彼らが真つ当な人間になっても、起こした罪が消えるわけでもない。仮に千を救った英雄になったとしても、犠牲になった者からするとただの仇だ」

事実、私や王も全ての者を救えたわけではない。
戦略の都合上、見捨てた集落は数多にある。

彼らから見れば、私達は英雄ゆうゆうという殺戮者えいゆうなのだろう。

「しかし、それでも私は槍を握りますな」

「強きものと戦うためか？」

「いえ、強きものと戦いたいというのは武人の性というものですが、私が立ち上がったのは民のためです」

静かに語り始めたシリューは吠えるように槍をうねり上げて振るう。

「汚職、賄賂、強奪、様々な悪意が罪のない民を食い物とし、それが当たり前のような世。 涙を流すのはいつも弱き民だ」

賊を切り裂き、血しぶきを浴びながらも、ただひたすら目の前の敵を突き、駆逐する。

止めることのできない激情、それがシリューの槍には表れていた。

「だが、武ではこの国の人々を助けることができない。 だからこそ、私はこの国を導くことができる主を探している」

彼女の思いと掲げる義を知り、私は王に仕え始めた頃の若かった自身のことを思い出す。

焚火を戦友達と囲み、夜遅くまで語り合ったものだ。

そのためなのか、私はシリューに理想を貫いてほしいと思ってしまった。

「シリュー、貴方ならきつといつか忠義を捧ぐことができる主君にめぐり合うことができるだろう」

私の言葉にシリユーは、何処か嬉しそうにも見えた笑みで頷いた。

「そうですね……」

シリユーに意味のあるような視線を向けられた気がしたが、戦場の空気が変わったことため、そのことを意識外へと追いやった。

[illegible]

賊軍を敗走へと追い込んだのだが、追撃を掛けることはなかった。その判断は正しいものだろう。

五千から成り立つこの軍の編成は、戦い慣れた正規軍三千と初陣を飾ったばかりの新兵達である。

初めての戦場に、新兵達の疲労が溜まったことは間違いない。

何よりも、先程打ちのめした賊軍は本体ではない。

情報だと一万を超える軍勢らしく、先程の軍は三千程しかないだろう。

このまま追い討ちを掛けて、主力とぶつかれば、こちらは大きな犠牲を払うことに成りかねない。

「日も暮れてきたようですから、今日の所は、此处に陣を敷くことになるでしょう」

本営から配給を頼張るシリユーは至って普段と変わらず、流石は歴戦の勇士を自称することはある。

それに対して、だ。

「うえ……し、死ぬ……」

「うう、今日のことを思い出すと吐き気が……」

「お、お腹が空いたんだな……こんなんじゃ足りないんだな」

カン達は、一步も動くことのできないといった疲れ切った様子で、地面に倒れていた。（一名は違う意味で）

「ふう、カン、そんなことが言えるのを幸せと思え。 ソン、吐いても食え、明日は持たなくなるぞ。 キョウ……お前は少し身体を絞ったほうがいいな」

倒れた見習い達に忠告と助言を言っていると、一人だけ優雅に食事をしていたシリユーがニタニタと笑い始める。

「ほう……やはり、らんす殿は面倒見がいい。 人が良いと言われ

たことがあるのでは？」

「……さあな、女性に対しては細心の注意を払っていたから彼女らには好評だったが？」

「なるほど、女ったらしというわけですな」

「そのおかげで、よく決闘を申し込まれたものだ」

面白おかしくシリユーと話をしていると、再び伝令の旗を持った騎馬が陣内を走っていた。

伝令内容は、この陣の東に数里離れた場所に賊軍が潜んでいることが、探査隊により報告があったようだ。

そう多くない数らしく、正規軍五百騎のみで奇襲を掛けるということで、新兵は陣内の警備を行え、という命であった。

「ふむ……馬鹿の一つ覚えのように奇襲とはな……」

「それを奇襲されるのだから世話がなくてすむ」

こういうのをウゴウのシユーというらしい。

これが頭のない賊の限界なのだろう。

それとも、賊の奇襲を看破したソウソウという者が凄いのか……。

「少し、見てみたい気もするな」

「？ 何をです？」

「この戦場を描いた才気に、だ」

「ふ、ならシリューは戻ったらどうだ？　引き返すなら今だぞ？」

ソウソウに興味を持ったのは私だけだったため、シリューには理由がない。

が、シリューは先程まで真面目なことを言っていた顔を一变し、悪だくみを企むような黒い笑みを浮かべる。

「ふふふ、先に言っておきますが、私はこういう行動は好物ですよ」

「だろうな」

出会ってまだ数日だが、彼女の性格がわかってきた気がする。

中々、面白いところがある魅力的な女性だと再認識したところで、気配を消しつつ奇襲部隊を追う。

「む……あの戦闘の騎馬の女性、できるようだな」

先頭を進む長い黒髪の女性の雰囲気から、かなりの腕を誇るように見えた。

手合わせを行ったわけではないが、この感じはシリューと出会った時の感覚に似ている。

私の発言に、シリューはからかうように口を開き説明を始める。

「お、流石は女好きのらんす殿、お目が高いな……彼女は、曹操殿の右腕と呼ばれる猛将、夏侯惇殿だ」

「なるほど、英雄の元には有能が揃うというわけか」

「揃えたというのが正しいかもしれませんが……陣を指揮している夏侯惇殿の妹に当たる夏侯淵殿のように才覚のある者は口説き落とされているようだな」

目利きもあるということは、名君の条件の一つだろう。

武に優れ、知と政に精通し、人望もあり、才を見抜く力もある。それを聞くと本当に会うのが楽しみだ。

「となると、シリユーも口説かれるのではないか？」

「ふう、前にも言いましたが、私は女性に興味はありませんよ」

軽口を言い合いながら歩いていくと、遂に私はお目当ての女性に见ることができた。

はつきり言えば、ソウソウという人間を過小評価しすぎていたかもしれない。

確かに、想像以上に小柄な女性だったが、彼女を纏う覇気は凄まじいもので、それ程の覇気を持つものは私が見てきた中で数人程度だ。

自信、才覚、その他諸々を内包した英雄の姿を見て、私の足は陣へと引き返した。

「む、最後まで見ていなくて良いのですか？」

「ああ、結果は出ている。賊兵が死体の山を築き、完璧な結果を出すだけだ」

結末を知っている物語ほどつまらないものはない。

私ができることは、明日彼女が描く劇中に参加するために身体を休

める
だけ
だっ
た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0966ba/>

円卓無双

2012年1月4日04時48分発行